

## コンドルセに由来する二つの遺産 ——量的、質的社会調査の発生と展開——

鎌 田 大 資\*

Double Heritages Derived from Condorcet:  
Generation and Development of Quantitative and Qualitative Social Research

Daisuke KAMADA

ユルゲン・ハバーマスの公共圏概念をシンボリック・インターラクショニズムの理論的伝統と照合し、憲法に守られ市民社会をもたらす公共圏という理念的構築物を、社会学の営みを基礎づけるものとして抽出した前稿（鎌田 2014; Habermas [1962] 1990=[1973] 1994）、またイギリスにおける市民社会論の創唱者であるアダム・ファースンと、フランス革命を指導し、ナポレオン憲法の制定に協力することによって、現行の各国憲法の重要な要素である最高法規性を組み入れ、法律における人権擁護の機構を定着させたシエスの業績を対比し、18世紀以降のヨーロッパ世界を特徴づける生政治にかかわる二つの政治的態度を、フォーコーに従って対比させた別稿（鎌田 2015; Ferguson [1767] 1980=1956; Siyès [1789] 2002=2011）の考察を、本論では継続する。

イギリスの名誉革命、フランス革命をへて、少なくとも理念的な意味では確立した公共圏において、新たに見いだされていく国民国家、地方自治体などの広域の人間の集合体が社会と捉えられるようになる。そこで、どのような政策を立て指導をおこなうべきか、多数の人間が織りなす集合的な相互作用の帰結の不可視性、予測不可能性をまえに、為政者は自己の直観以外に専門家の諮問を得て討議を進めねばならない状況に立ちいたった。シエスによる国民概念の提出以降、世界の指導者は、主に経済学者の予測に従い、社会全体の生産性を高める工夫に努めてきた。

しかし経済学者による予測は的中するとは限らず、また大規模に進める施策や制度の歪みが現れた場合、それを是正するために社会や人間集団の実情について詳細に知る必要が生じる。19世紀半ば以降に創始される社会学という学問領域は、そうした要請にこたえることを第一義に組織されてきたと考えてよいだろう。本論ではフランス革命の直前からその渦中にいたる激動期に、重要な着想を書きのこしたコンドルセに、今日の社会学において枢要な位置をしめる社会調査の2大潮流の起源を求める。

### 1、コンドルセの2つの構想とその継承——『人間精神進歩史』と社会数学

経済的統計の先駆となる具体的な著作として、スミスに先行して量的研究アプローチの萌芽

---

\*人間関係学科 准教授

的試みが公刊され、経済学研究の対象となっている。たとえば社会という複雑系に生じる諸現象の不可視性を、統計を通じて確率論的に可視化するため、重農主義者ケネーの『経済表』(Quesnay [1758] 2005=[1990] 2013)における経済的循環の数量的把握、租税の農業投資の提唱などが、アダム・スミスの政治経済学に継承された。その後、スコットランド、アイルランドやロンドンにおける人口学や財政学の嚆矢となった政治算術 (political arithmetic) の試みを経て、ドイツの記述国状学 (descriptive statistics, Staatenkunde)<sup>1</sup>では軍事的、財政的な合理的政策科学の確立が模索され、数量的に計算された諸種の指標をにらみつつ、政策提言をおこなう現在の経済学の実践がそれに継続する (Foucault 2004=2008)。

さて、こうした市民社会論と人権アプローチの対比からだけでは、社会学における量的調査と質的調査という2大領域の形成は導かれない。ここでシェイエスやファーガソンの同時代人で、彼らとも相互に影響を与えあったコンドルセの2分野における業績を振り返ることで、量的調査、質的調査が具体的な調査技法として確立されていく歴史の流れが見えてくる。革命当初、コンドルセは民衆の指導者の一人と見なされたが、ジャコバン党の恐怖政治がはじまると罪を得て逃亡し、捕えられて自殺したと見られている。コンドルセは社会技術 (art social) の一部を社会数学と名づけられ、確率論の研究により統計解析の基礎を築いた (Condorcet 1785)。また逃亡中に執筆した『人間精神進歩史』(Condorcet [1793-94] 1970=1951)では、人類発祥以来の文明史の構想が提示され、広く科学的知見一般の社会的応用が提唱されている。19世紀において社会学と名づけられた知的営みは、おおむねコンドルセの2つの著作が示唆した方向性に支配されていたように見える。

まず『人間精神進歩史』(Condorcet [1793-1794] 1970=1951)である。本作に示唆を受けてオーギュスト・コントによる三段階の法則が着想され、人類文明の一元的、直線的進化の道筋を辿ろうとする社会進化論の構想への道筋が引かれる (Comte [1830-1842] 1968-1969; Spencer [1874-1885] 1966)<sup>2</sup>。19世紀の終わりに社会進化論が学問の世界の常識となり、系統発生を個体発生が繰り返すという反復説 (recapitulation theory) にもとづく教育論 (Vincent [1897] 2009) などが語られていたころ、進化人類学となっていた人類学内部での独自の展開が生じる。そして文化相対論、文化人類学、文化とパーソナリティ理論などが提唱され、そうしたものが社会学に应用されてフィールドワーク、参与観察、文化社会学研究 (cultural studies を含む) が派生していく。これはコンドルセの著作から派生した研究経路への反発、見直しによる反動形成を経て現在の質的社会調査につながる方向性である。

1839年にコントの著作『実証哲学講義』(Comte [1830-1842] 1968-1969)で、「社会学 (sociologie)」という言葉が公式に考案されてからしばらくすると、チャールズ・ダーウィンの進化論、ハーバード・スペンサーの社会進化論の影響を受けるか、それとの距離を測りながら研究を進めるかのどちらかを選んだ一群の人々により、社会学的思考の道は切りひらかれていく。

シェイエスのテキスト同様、『人間精神進歩史』では社会技術という用語も導入されている。18世紀から19世紀にかけては、社会的 (social) という形容詞自体が村や町の社交界や人付き合いなどの古い意味から変容してきていた<sup>3</sup>。シェイエスの創案による国民概念とも連動する広い範囲の民衆を、集合として捉える視点を包含しつつ、国の制度の問題を社会問題として捉え、その改善の施策を社会福祉とし、その手段をソーシャルワークとするなど、19世紀後半の制度変容の目標を与えるマジック・タームとして、この言葉は機能した。コンドルセの段階での社会技術は、多数決によって民衆の意思に従う政治をおこなうために必要な施策として位

置づけられており<sup>4</sup>、その有力な手法として「組み合わせや確率の計算」の応用が提案されている（Condorcet [1793-1794] 1970:209=1951:270）。その内容が社会数学であろう。これはコンドルセが後世に、特に今日の社会学にもたらしたもう一つの遺産である量的、統計的な社会調査にもちいられることになる確率論の潮流である。

コンドルセの社会数学としては、『多数決の蓋然性に対する解析の適用についての試論』（Condorcet 1785）という論考がよく言及される。この潮流は生命保険や年金の収支予測を計算するための保険数理（actuary）として発展し、応用されたのち、バージェスの予測研究にも継承されている。コンドルセの死後、統計データの出版ラッシュを経て、平均、標準偏差、相関係数、因子分析、分散分析、サンプリングなどの諸概念、諸技法が発展する。それを受けて20世紀中盤に、ポール・ラザースフェルド、ロバート・マートンやその共同研究者たちによる集大成がおこなわれ、量的社会調査でもちいる統計分析技法、既存の社会理論体系から切りだした仮説を量的社会調査により検証するというスタイルなどが編みだされる。こちらは確率論による仮想的、理論的な社会現象にまつわる諸計算の試みが一段落して、一時的に忘却されたのちに復活し、現今の合理的選択理論の流行を見るにいたる経路である。コンドルセは、現代における統計のそうした社会的活用全般を最初に提唱した人物の一人である。

## 2、数量化以降の統治性の再変容——確率論の導入

最終的に、社会進化論は人類学内部での文化概念の激変を経て、質的社会調査の流れに接合され変容していく。そして量的社会調査は統計をめぐるいくつかの技法的発明とともに応用範囲が広がり、社会学の理論的な営みに活用されていく（Hacking 1990=1999）<sup>5</sup>。

コンドルセの社会数学は、新しく設置される民主的政府の陪審制において、陪審員が何人おり、何対何の比率で有罪決定ができるようにすれば、冤罪発生率を最小にできるかについて、複雑な仮定を置いて導かれる確率論的思考実験だった（Condorcet 1785）。その後、実際の制度が機能しはじめた経験も踏まえて、ピエール・シモン・ラプラスとシメオン・ポワソンが同様な確率論的思考実験をおこない論争した（Laplace [1814] 1951=1997; Poisson 1837）。二人のうちラプラスは、世界を構成する原子一つ一つについてその運動状態を知ることができるほど、大量の情報を把握できる魔物がいれば、世界の物事の動向を完全に理解できるはずだと、決定論の極致ともいべき仮定を提唱した<sup>6</sup>。後世、その魔物は「ラプラスの魔」と呼ばれた。絶対王政の君主が国民一人一人の個々の商取引についてすべて把握して、政策を立てることができないように、実際には、このような「魔」は存在しない。このテーマは予測という問題について考えるうえで、何度も立ち返るべき基本的なメタファーとなる。またポワソンは、コイン投げなどで試行する回数が増えれば増えるほど、表裏のどちらが出るかの回数は、試行回数に2分の1という確率をかけた結果、すなわち理論的な予測値に近づくはずなどと考える大数の法則を発表した。こうしてコンドルセ以来の確率計算による理論的考察の流れは、主要な数学者たちによる論争を経て相応の盛りあがりを見せたあと、ひとたびは忘却される。

やがて多様な社会的指標の数量的データの出版ブームが、ナポレオン1世の帝政末期以降のヨーロッパに広まった。19世紀の半ばを迎えると、天文学者アドルフ・ケトレが犯罪、保健統計を多数検討して図表化するうち、大きな標本数を集めた統計においては、数値の真ん中である平均値または中央値周辺が膨らみ、極端に大きい数値と小さい数値を表す両すそがへこんだベル・カーブが得られることを見だし、これに正規分布と呼んだ。そして骨相学などを含む生体計測学に取りこんでいたイギリスのフランシス・ゴルトンや、その継承者のカール・

ピアソンらが分散、標準偏差、正規分布など、今日、大量データを扱う統計的記述において、必要不可欠な数学的諸概念となった基礎統計量を考案、導入した。変数間の相関について何かを知ることができるという着想もゴールトンによるという。そして相関係数が開発される。

コントがコンドルセの『人間精神進歩史』(Condorcet [1793-1794] 1970=1951)から示唆を受け、社会学の内容として神学的段階、形而上学的段階、実証的段階という三段階の人間社会の進化を論じた(Comte [1830-1842] 1968-1969)あと、ドイツ、フランスでそれぞれに数量化をとまなう社会学的思考が発展する。コントがもちいようとした社会物理学という名称で、多様な統計調査を集め正規分布を見出したケトレに加え、アンドレ・ミシェル・ゲリーの犯罪社会学、フレデリック・ルブレの家族社会学、ギュスターヴ・ルボン、ガブリエル・タルドの群衆論が、エミール・デュルケームによる批判的な集大成の土台を構築しているあいだ、ドイツ、オーストリアではルートビヒ・グンプロビチ、グスタフ・ラッツェンホーファー、フランツ・オッペンハイマーの闘争の社会学で、ダーウィンの進化論の生物学主義とは距離をとってヨーロッパ諸民族間の闘争を描いた。また同時代のフリードリヒ・ニーチェやアルトゥル・ショーペンハウアーらの生の哲学、実存哲学の影響を受けて、19世紀末から20世紀にかけて、デュルケームを含め、マックス・ウェーバー、ゲオルク・ジンメルら、ヨーロッパの巨匠たちは個別に自己の社会学を展開、体系化した。こうして学問としての新たな構想と深みを与えられた社会学は、大きな飛躍を遂げる(鎌田 2007)。アメリカでは社会進化論的な歴史研究で、レスター・ウォード、ウィリアム・サムナーが、それぞれに社会進化論と拮抗しうる文明的、宇宙論的な大作を出版していた。

統計を社会学に取りこみ、今日の量的社会調査の理論的支柱ともなっているのはデュルケームの『自殺論』(Durkheim 1897=1985)だが、そこでのケトレの平均人概念批判は著名である。ゴールトンらとデュルケームやケトレの平均や正常という考え方は異なっている。正規分布の真ん中の、層の厚い部分をゴールトンらは凡庸な層と捉え、そこに当てはまらない少数の優れた層と劣った層に注意を集中した。そして天才の家系、また多数の犯罪者を輩出した知的に劣った家系について彼は考察した。さらに優秀な家系同士の婚姻からさらに優秀な子孫を得て、劣った家系については断種してしまう優生学という発想を公にした。この考え方は第二次世界大戦前後まで全世界的に信奉された。それに対し、ケトレやデュルケームは正規分布の層の厚い部分こそ正常と考えた。「それは普通ですよ (C'est normal)」という今日のフランス語日常会話の常套句に、これは受け継がれている。20世紀初頭の社会学者たちは、デュルケーム『自殺論』(Durkheim 1897=1985)での先駆的な取りくみを継承し、数量的データをどのように学問に取り入れるかをめぐっても判断材料を探していた。

まだ基礎統計量が活用されている程度の状況で、膨大に蓄積されはじめた統計データから何を知ることができるのかと、熟考せざるをえなかったのが、シカゴ大学におけるアーネスト・バー杰スらの世代の社会学者たちであり、統計に親和的な発想で議論を展開した指導者、フランクリン・ギディングズに率いられたコロンビア大学の社会学者たちであった。そこでは蓄積されはじめた統計データを学問的に処理する技術開発が要請されていた。その直前、19世紀末には、チャールズ・ブースやジョセフ・ラウンツリーが着手し、ロンドン住民を全数調査した貧困研究で、最低生活線が設定される。20世紀初頭にその追試というべき調査において、アーサー・ボウリーがサンプリングの技法を実用化し、全数調査をせずとも無作為抽出を計画的におこなうことで、大きな人口に関する統計指標をある誤差の範囲で論じうようになる。そして相関係数が社会調査でも実用化され<sup>7</sup>、クロス表をもちいた初期の多変量解析がお



こなわれる。さらにバージェスが予測調査に着手した 1920 年代後半には、人間の知能を多元論的に追求しようと考えた心理学者、ルイス・サーストンにより態度尺度の構成がおこなわれ (Thurstone 1928)、これを応用してバージェスの結婚、婚約の予測研究は進められていく。

### 3、社会進化論から文化相対主義へ——人類学を通じた質的研究の変貌

本論冒頭で述べたように、社会学が発展しつつある 19 世紀末、1892 年にシカゴ大学は設置され、世界に先駆けて社会学専門学部を開設することで、大学組織における社会学の制度化に先鞭をつけた。専門雑誌、教科書も準備でき、1920 年代半ばごろまでには、パークとバージェスを中心とする大学院生の指導育成のシステムも整備できた (鎌田・中野 2003-2005)。

とはいえ、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、シカゴ大学での社会学の営みは、現在ののように、社会調査で得られ、吟味された社会的事実をデータとして構築される社会理論の集積という形は取っておらず、主に理論社会学と呼ぶべき分野に業績が集中していた。現在の社会学における社会意識論や多様な文化研究に相当するものは存在しなかった。その成果にはたとえば、左翼思想を含めた 19 世紀ドイツの社会理論の紹介 (Small 1905)、系統発生を個体発生が繰り返すという社会進化論の反復説 (recapitulation theory) にもとづき、人類の知的発達史全体を個々の学生が学びなおす壮大な教育プログラム (Vincent [1897] 2009)、歴史的地域研究マニュアル (Small & Vincent 1896) の整備、生物学的な男女の性差の説明に依拠した性の科学 (Thomas 1907) などがある。その段階で、社会学と平行して人類学が実質的な変貌を遂げつつあり、そうした変化がトマスを通じて紹介されて、シカゴ大学に新たな質的調査研究の道筋をつけることになった (Thomas 1909; Thomas & Znaniecki [1918-1920] 1974)。

人類学に変貌をもたらしたのは、ドイツ出身だがアメリカで頭角を現したフランツ・ボアズである (Stocking [1968] 1982; 1974)。彼が、社会進化論的な単一の「文化」の進化史から、複数の「諸文化」に関する「文化人類学」への視点の変化を実現させた。ボアズは実験生理心理学から出発したが<sup>8</sup>、フィールドワークの経験を経て、精神物理学 (psychophysics)、人文地理学 (anthropo-geography)、民族心理学 (folk psychology) へと研究の呼称を移行させていった。実験室での研究に行きづまりを感じたボアズは、北極のエスキモーが海の色をどう感じているかという色彩語彙の現地調査に赴き、認識枠組みが自然観察の精度や程度を拘束する度合いが強いことを実感した (Stocking [1968] 1982: 133-160)。そして各部族の言語の習得にも励み、各文化特有の世界観には優劣はつけられないという思いを強くした。その過程で、彼の著作から単一の進化の線上に配置される単数形の文化 (Culture) は姿を消し、それぞれの民族の独自性を認めあう複数形の諸文化 (cultures) に改訂されていったという (Stocking [1968] 1982:195-233)。

当時、スペンサーの民族資料集に見られるように、社会進化論の実証のために世界中の多様な民族の資料が整理されてきていた (Spencer 1873-1919)。そうした蓄積を背景に、人類学に新たに導入された文化相対論の視点から、個別民族文化の総体的記述の蓄積、深化に向かう運動が提唱、実践されていく。そして社会学においても文化の記述をめざすエスノグラフィが製作されていく<sup>9</sup>。

そのまゝに、文化の記述としてのエスノグラフィに人間の心理洞察に関する深みを与えるような作品として、19 世紀末の段階でウィリアム・ジェームズの『宗教的経験の諸相』(James 1902=1970) が上梓されていることに、注目せねばならない。

哲学に由来する理論的な諸潮流が、社会学という分野でどのように実を結んできたかを、

ジョージ・ミード研究者ハンス・ヨアスは、文獻的に明らかにする業績を積みかさねている (Joas 1993, [1992] 1996, [1997] 2000)。彼によれば、タルコット・パーソンズを代表とする構造機能主義の社会理論に欠けていて、ミードをはじめとするプラグマティズムの哲学や、シンボリック・インタラクショニズムに見いだせるのは、人間精神の創造性に関する着眼である。たとえばそれを価値の創造という側面について考えると、第一に想起されるのはニーチェの創造的破壊概念など、伝統的諸価値の転倒の試みである。ジェームズの作品は改宗、改心をめぐる宗教的経験を各種の手記から浮き彫りにしており、これは人間が新たな価値の創造をおこなう契機を記述し、解釈しようとする斬新な企てと考えられる (Joas [1997] 2000:20-53)。質的研究における文化の記述という方向性は、ジェームズの時点で人間精神や経験の「厚い記述」という方向に深化させられた。文化へと向かう視点の方向性と人間の経験を記述する際の深度という次元は、1990年代に改めて提唱され、21世紀の今日まで質的研究の分野での研究を規定する尺度となっている (Denzin 1984, 1997, [1989] 2001)。

#### 4、人権アプローチと質的社会調査、市民社会論と量的社会調査の相関性

最後に、以上のように整理した歴史的背景のうえに、バージェスの学問業績の軌跡を浮き彫りにし、その後進への指導を検討することで現代社会学の中心の一角を占める社会調査に対して、彼が残した遺産を明らかにする<sup>10</sup>。バージェスは、社会調査の量的方法論と質的方法論の両者をともに指導し隆盛に導いた。そしてその両技法の諸特徴は、前記のファーガスンが先鞭をつけた市民社会論と、シエスにより憲法制度に結実した人権アプローチの系譜に、関連づけて対比させることができる。

量的技法はグラント (Graunt [1662] 1964= [1941] 1968) の先駆的業績以来、人口学、財政学などにおいて発展してきた。現在では国民の人口や国民が支払う税額に関する量的知見に基づき、税制、年金制度、医療保険制度、国家事業、自治体事業の年間予算などの根幹が決定される。社会学の研究技法として量的研究が本格的にもちいられはじめるのは、バージェスが仮釈放の予測研究で、仮釈放の成功可能性に関する簡単な尺度を構成して、先鞭をつけた1920年代末以降のことである。ちょうどその頃、人間知能に関する多因子論を構成するための準備作業として、シカゴ大学心理学部のサーストンがいくつかの態度尺度を構成し、因子分析を開発しつつあった。そのことを知り、バージェスは大学院生だったレナード・コットレルとともに、結婚の成否に関する予測尺度構成のための予備調査において、社会学者として世界に先駆けて因子分析を取り入れた。やがて、サーストンの等限間隔法より簡便な手順で尺度構成ができるリッカート尺度が考案され、広くもちいられるようになる。

バージェスの量的社会調査者となった指導生や協力者のうち、著名な人物としてサミュエル・ストウファー、フィリップ・ハウザー、オーティス・ダンカンらがいる。ストウファーはバージェスの指導生であり、バージェスがコットレルとともに習得したサーストンの態度尺度で得られた結果と、質的データを研究者が主観的に評価する場合の精度を比較する博士論文で、研究者としてのスタートを切っている (Stouffer [1930] 1980)。ラザースフェルドは、オーストラリアでは心理学者として失業やマーケティングの研究に取り組んでいた (Jahoda et al. [1933] 2002) が、アメリカではまずストウファーと協力しあい (Stouffer & Lazarsfeld [1937] 1972)、ストウファーが中心となった『アメリカ兵』 (Stouffer et al. [1949] 1977, [1947] 1977a) の調査で、統計分析技法の創案を通じ、バージェスの予測研究にも参加した。彼はそこで潜在構造分析を開発し、これはのちにパス解析として展開、定着した (Lazarsfeld 1950, 1950a)。このことを

考えると、ラザースフェルドをアメリカでの社会学の営みに関与させ、今日のスタイルの社会意識調査、社会学における統計分析技法の根本を彼が定めるうえで、間接的に大きな影響を与えた一人がバージェスだといえる。

そしてマートンとラザースフェルドは、社会理論体系を統計データにより検証するというスタイルで、統計分析を理論的に活用する方法を編みだす (Merton [1949] 1968=1961; Lazarsfeld & Rosenberg 1955; Lazarsfeld et al. 1972)。しかし量的な調査では、観察された相関の解釈を既成の理論的知見や常識論の検証という枠に当てはめる傾向もあり (唐沢・戸田山 2012)、既存の理論枠組みに当てはまらない突飛なデータや、理論を検証できなかったデータは捨てられ、新奇な社会学理論発見の機会は乏しい (Glazer & Strauss 1967=1996)。統計分析は大規模な母集団の属性指標、複数の指標の相関を数量的に計測、記述するのが本領であるが、統計的有意性を確保するには、ある程度の標本数が必要となり小集団の研究には不適である。また標本の部分ごとに正反対の傾向がある場合、標本を適切な基準で分類、区分できなければ、その変数に関する相関が打ち消しあい、有意差が検出できなくなることがある。この変数に関する交互作用も、この技法に特有の問題である (真鍋ほか 2010:10-12)。

バージェスの指導生で質的技法の分野で著名な社会学者としては、エヴェレット・ヒューズ、ハワード・S・ベッカー、アンセルム・ストラウスらがいる。質的調査ではヒューズが都市の専門職の研究と調査指導をはじめた (Hughes 1979, [1971] 1984)。質的研究法の方法論としては、ズナニエツキが考案した「分析的帰納法」が知られ、それを調査技法として実践し、完成させたのはベッカーやストラウスである (Znaniecki [1934] 1968=1971; Becker 1970, 1986; Strauss 1991, 1993)。ストラウスはマートンやラザースフェルドの指導生であるバーニー・グレイザーとの共著で、グラウンディッド・セオリーの土台を作った (Glazer & Strauss 1967=1996)。ベッカーとグレイザーは現在も健在で活動中であり、後続世代にはノーマン・デンジン (Denzin 1984, 1997, [1989] 2001, 2003) などがいる。

この技法は、経験的観察にもとづくフィールドノート群を吟味することから現象の記述、理論化に至るものである。その際、観察された少数事例に当てはまる命題が生成されると、普通は考えられている。しかし、この技法が本来的に少数事例についての研究に限界づけられているわけではない。むしろ少数事例からでも興味深い命題を導き出すことができ、調査対象に対する深い知見を得やすい技法というべきだろう。ひとたび質的研究の知見が既成の理論と対照されて、新たな理論的地平が切りひらかれ、一般化、活用される場合、社会理論の生成、改訂が促される (伊藤 2012)。さらにそこに社会的な不正義、不公正が観察された場合、社会運動を経て人権擁護を意図する公共圏が発動することで、法律の改正や新制度の創出が導かれることもある。人権は万人に平等に与えられており、たとえ少数者でも誰かの人権が毀損されたことがわかった場合、社会の安寧秩序が損なわれない限りという限定つきながら、社会全体にかかわる変革が要請されるからである。すなわち少数事例について一般化がおこなわれたのちに、それを土台にした演繹的な社会理論、制度の創出が起こりうる。

大きな母集団について当てはまる命題を経験的に確認する量的社会調査と、少数事例より出発して社会制度自体の改変を演繹的に導くこともある質的社会調査は対照的であり、これについて以下のように理念型的整理をおこなうことができる。

量的社会調査は、大数の法則が要請する大きな母集団についての経験的記述であり、フーコーのいう安全・領土・人口の統治性に対応する (Foucault 2004=2008; 鎌田 2015)。それは、市民社会論で語られる各勢力のバランスを均衡させながら、生産効率や税収を拡大させる生政治

にかかわる施策を探索するための調査技法である。

質的社会調査では少数事例の検討から一般化された理論的知見を土台に、社会全体にわたる制度の改変が演繹的に導かれることがある。たとえばアメリカにおけるレイベリング理論の流行や司法政策への応用が想起される。これはフランス革命で挫折した人権アプローチの、小規模かつピースミールな復活と考えられる。その意味では、原告の訴えに従い法律を検討し、原告、被告の主張を照らしあわせたうえで適正な処分をおこなう裁判制度自体が、法の裂け目に陥り当事者同志では決着が付きがたい事例を、法律に照らして再検討し、最高法規たる憲法に違背しない範囲で妥当な判決を執行するものであり、少数事例を通じて法の体系性を再検討する機会と考えられる。裁判は憲法に守られた市民社会が実質的に機能するための制度の一角である。社会科学は調査報告の読者層を公共圏として想定し、常に少数事例の検討を通じて制度の不備を告発しうる立場にあり、マスコミを通じた世論喚起によって、声なき声を政策立案の場に届く形に加工しうるメディアの一角を構成している。

ただし上記の区別はあくまでも一面的かつ理念型的なものであり、現実には量的社会調査が演繹的にはたらくことも、質的社会調査が帰納的に利用されることもありうる。むしろ質的調査、量的調査の知見をともにもちい、理論の検証にとどまらずその改訂や生成がおこなわれれば、それにこしたことはない。

本論のむすびとして、上記の区別を援用し、量的社会調査と質的社会調査の以下のような相補性を新たに構想する。

従来の方法論では、質的調査でパイロット的に得られた視点、着想、理論などを量的調査で検証するという設計が語られることが多かった。そうではなく、小集団に条件つきで当てはまるミニ命題の集積という社会学本来の持ち味を活かすため、たとえば以下のような方法もありうる。量的社会調査により、統計的有意性を失わない範囲で、ある理論的命題が当てはまる母集団を探索する。そして特定された集団に質的調査者が向かって、長期にわたる丁寧なフィールドワークをおこなう。さらにその特殊な社会組織特有の社会心理学的洞察を獲得し、その知見により従来の理論を改定し豊饒化する。こうした従来とは逆のタイプの社会調査設計を可能にする量的調査技法はまだ開発されていないと思われるので、上記の設計自体も現状では夢想にとどまる。この手順はいわば、従来、質的調査者が理論的サンプリング(Glazer & Strauss 1967=1996)によって、社会学的命題化の手がかりを得てきた手順の一部に量的社会調査の手法を適用し、統計的手順を組みいれようとするものである<sup>11</sup>。

こうした方法論により 21 世紀の社会科学にふさわしい理論的命題が得られれば、これこそ、そこで要請される重責(鎌田 2015:1)に答えるものになりうるかもしれない。質的研究技法は、個々の調査者が取りくむことになった対象に応じて、状況のなかで編みだしていくものである。その技法は、もともと最小限の規制と規則の組み合わせで構成された間口の広いものであり、そうした創意工夫を多様に盛りこむことができる。

## まとめ

社会学はファergusンに一つの起源をもつ市民社会論にかかわりが深く、フランス革命後の、シエスの憲法案を導いた人権思想にもかかわる公共性の高い議論の場として創案された。社会調査は公共圏で交わされる公共の議論に材料を提供する営みであり、コンドルセによる 2 つのアイデアは、20 世紀に入ると社会数学を継承する数量的な記述、分析と、『人間精神進歩史』に由来する社会進化論に依拠した博物学的進化人類学から、反動形成的に変容し、編みだされ



た質的な調査技法による社会的事象の記述，分析に分岐した。その両者が確立していく過程でバージェスが指導した人間生態学，都市社会学，予測研究，家族研究のプログラムが研究調査の技法開発の機会提供に大きく貢献し，社会調査や社会理論が今日の形態に至る道程を切りひらいた。

2種の社会調査には以下のような特徴がある。

量的調査は市民社会論，政治経済学のリベラリズムの伝統に立ち，細部まで確定することができない複雑な経済，社会現象について数量的な記述を提供する。そしてフーコーのいう領土・人口・安全の統治性の伝統に準拠しつつ，その知見を利用して政策立案することが可能である。

また文化人類学者が個別文化の特性を尊重し，追及するようになったように，社会学者が多様な民族，職業集団などの下位文化を記述し，そこで生きる生活者の社会心理を内面的に理解，解釈した知見を，質的調査は提供する。個々人の内面性，感じ方を尊重する面で，それは人権アプローチの系譜に属し，社会的不公正に苦しむ人々や集団が発見されれば，それを是正すべく法や制度の改正をめざした社会運動を起こす根拠となりうる。

## 注

- 1 統計の起源として，ドイツにおける記述国状学が言及されることもある（Lazarsfeld 1961:283-91）。ただし statistics に統計という言葉をあててよいのは，本文でも触れるナポレオン時代末期の，統計資料の出版ブーム以降のことと考えるべきだろう。ドイツの官房学者が集めた国状学のデータは，政治上の秘密と見なされて秘匿されがちだったともいわれている（Hacking 1990:6-26=1999:26-40）。出版されないデータは，公共圏で討議されるデータとはなりえない。
- 2 マキヤベリ（Machiavelli [1513] 1961=1998），モンテスキュー（Montesquieu [1748] 1951=[1987] 1997）ら政治学，行政学の先駆者とされる著者たちは，有史以来の資料の博引傍証を実践しているが，古典時代から現代に至る人類の通史という発想には欠けている。人類の文明史を語る先駆的な著者はむしろアラブ圏の歴史学者，イブン＝ハルドゥーンである（Ibn Khaldūn [1377] 1858=2001）。その意味では，ヨーロッパで人類の通史を文明の発展史として構想した最初の一人は，コンドルセだったのかもしれない。
- 3 OED（2002）において，町の近隣や社交界程度の規模の社会集団を超えて，国や地方自治体規模の集団を指示しうる形で social という言葉がもちいられる用例は，19世紀前半，1830年代まで登場しない。掲載された事例は社会的課題（social question. 1833年），社会問題（social problem. 1854年）などで，最も古い引用文の著者はともにコントと連携して著作を発表した実証主義者ジョン・S・ミル。
- 4 多数決を政治的に有効なものと見なすために必要な確率論上の論理操作が，以下に説明されている。また世論を多数決によって表明される政治的意見の集積として数量的に処理する技術が，社会技術の一側面として述べられている。「長い間の誤謬を犯したのち，また不完全ないし漠然たる理論に迷わされたのち，文筆家たちはついに人間の真の権利を認識し，人間は理性的判断力を形成し，道徳観念を獲得できる感性的生物であるという唯一の真理から，これを演繹するに至ったのである。[改行] こうした権利を維持することがもたら政治社会のうちに人間を結合する目的であったこと，社会技術とは，もっとも広い範囲において，人間がこうした権利を維持するよう保証するものでなければならないとともに，完全に平等にこれを保護するものでなければならないということを，文筆家たちは知るに至った。そこで各人の権利を確保するこうした手段は，それぞれの社会における共通の規則に従うものでなければならないから，こうした手段を選択し，こうした規則を決定する力は，社会そのものの多数派の成員のみに帰属すべきものだと考えられた。すなわち，各個人は，こうした手段を選択する際に，自分自身の理性に他人の理性を無理に従わせなければ，自分の理性に従って進むことはできないのだから，多数派の意見であるということこ

それは、平等を阻害せずに全員が採択できる真理の唯一の特性なのである。」(Condorcet [1793-94] 1970:153-154=1951:186. 傍点による強調箇所は邦訳書に従う。原典では斜体。) なお本論での引用文は、字体、仮名づかいも含めて、適宜、文脈に合わせて現代風に変更している。

- 5 イアン・ハッキングの知見は本段落にとどまらず本節全体にもちいられる。
- 6 該当する記述は以下の通り。「ある知性が、与えられた時点において、自然を動かしているすべての力と自然を構成しているすべての存在物のおおの状況を知っているとし、さらにこれらの与えられた情報を分析する能力をもっているとしたならば、この知性は、同一の方程式のもとに宇宙のなかの最も大きな物体の運動も、また最も軽い原子の運動をも包摂せしめるであろう。この知性にとって不確かなものは何一つないであろうし、その日には未来も過去と同様に現存することであろう。」(Laplace [1814] 1951:4=1997:10)
- 7 社会学ではじめて相関係数をもちいて調査結果の解釈をおこなったのは、コロンビア大学の大学院生だったトマス・ウーフター (Woofter [1920] 1969) とされている。
- 8 この出発点は、ジェームズやミードも同様に踏まえていたものである (James [1892] 1984=1992; Mead 1894)。
- 9 合衆国国立博物館の民俗学部門の展示に関し、民具を民族集団から切りはなして、社会進化論にもとづき単一の進化過程の各段階を構成するように配置し、タイプ別に分類、整理する方法に、ボアズは苦言を呈した。そうではなく、各民族文化の独自性、自律性を強調する方向で、民族集団ごとの民具をまとめて展示する方法に切りかえようと彼は提言した (Boas [1887] 1974)。文化の記述から、文化を生きる主体の社会心理学へという 20 世紀後半の社会学におけるエスノグラフィの動向については、鎌田 (2006) を参照。
- 10 バージェスの貢献についての論者自身の関心については鎌田 (2011, 2015) などを参照。
- 11 シンボリック・インタラクショニズムを標榜し、層化無作為抽出などを経て得られた調査協力者にインタビューしたデータを、グラウンディド理論の手順で処理した人種関係に関する調査がすでに存在する (Bonilla-Silva & Embrick 2007)。しかしその知見は人種関係に関する過去の常識的な知見を追認する程度にとどまり、経験や直感にもとづく理論的サンプリングで得られたデータの解釈よりすぐれた成果をあげているわけではないように思われる。

## 参考文献

- Becker, Howard S., 1970, *Sociological Work: Method and Substance*, Chicago: Aldine.
- 1986, *Doing Things Together: Selected Papers*, Evanston, IL: Northwestern University Press.
- Boas, Franz, [1887] 1974, "The Principles of Ethnological Classification," Stocking 1974:61-67.
- Bonilla-Silva, Eduardo and David G. Embrick, 2007, "'Every Place Has a Ghetto...': The Significance of Whites' Social and Residential Segregation," *Symbolic Interaction*, 30:323-345.
- Comte, Auguste, [1830-1842] 1968-1969, *Cours de Philosophie Positive*, T.1-6, Paris: Éditions Anthropos.
- Condorcet, Jean-Antoine-Nicolas de Caritat, 1785, *Essai sur l'application de l'analyse à la probabilité des décisions rendues à la pluralité des voix*, Paris: l'Impr. royale. (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k417181>. 2014 年 4 月 29 日閲覧)
- [1793-1794] 1970, *Esquisse d'un tableau historique des Progrès de l'esprit Humain*, Paris: Librairie philosophique J. Vrin, ([http://classiques.uqac.ca/classiques/condorcet/esquisse\\_tableau\\_progres\\_hum/esquisse\\_tableau\\_hist.pdf](http://classiques.uqac.ca/classiques/condorcet/esquisse_tableau_progres_hum/esquisse_tableau_hist.pdf). 2014 年 4 月 29 日閲覧) (=1951, 渡辺誠訳, 『人間精神進歩史 第一部』岩波書店.)
- Denzin, Norman K., 1984, *On Understanding Emotion*, New York: Jossey-Bass.
- 1997, *Interpretive Ethnography: Ethnographic Practices for the 21st Century*, Thousand Oaks, California: Sage.

- [1989] 2001, *Interpretive Interactionism*, 2nd ed., Thousand Oaks, California: Sage.
- 2003, *Performance Ethnography: Critical Pedagogy and the Politics of Culture*. Thousand Oaks, California: Sage.
- Durkheim, Émil, 1897, *Suicide: Étude de Sociologie*, Paris: Félix Alcan. (=1985, 宮島喬訳, 『自殺論』中央公論社, 原書第3版の翻訳.)
- Ferguson, Adam (Ed., Louis Schneider), [1767] 1980, *An Essay on the History of Civil Society*, New Brunswick, New Jersey: Transaction. (=1956, 大道安次郎訳, 『市民社会史』上・下, 河出書房.)
- Foucault, Michel, 2004, *Naissance de la Biopolitique: Cour de Collège de France (1978-1979)*, Paris: Gallimard/Seuil. (=2008, 慎改康之訳, 『生政治の誕生——コレージュ・ド・フランス講義 1978-1979 年度』筑摩書房.)
- Glazer, Barney G. and Anselm L. Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine de Gruyter. (=1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見』新曜社.)
- Graunt, John, [1662] 1964, "John Graunt's *Observation (Natural and Political Observations Made upon the Bills of Mortality)*," *Journal of the Institute of Actuaries*, 90:1-60. (<http://www.actuaries.org.uk/research-and-resources/documents/john-graunts-observations-foreword-bernard-benjamin>. 2014 年 8 月 12 日閲覧.) (= [1941] 1968, 久留間鮫造訳, 『死亡表に関する自然のおよび政治的諸観察』第一出版株式会社.)
- Habermas, Jürgen, [1962] 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied (Luchterhand), Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= [1973] 1994, 細谷貞雄・山田正行訳, 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』第2版, 未来社.)
- Hacking, Ian, 1990, *The Taming of Chance*, Cambridge: Cambridge University Press. (=1999, 石原英樹・重田園江訳, 『偶然を飼いならす——統計学と第二次科学革命』木鐸社.)
- Hughes, Everett Cherington, 1979, *The Growth of an Institution: The Chicago Real Estate Board*, Chicago: Arno.
- (Ed., Intro., David Riesman and Howard S. Becker) [1971] 1984. *The Sociological Eye: Selected Papers*. New Brunswick, New Jersey: Transaction.
- Ibn Khaldūn, [1377] 1858, *al Muqaddimah*, V.1-3, Paris: Benjamin Duprat. (=2001, 森本公誠訳, 『歴史序説』1-4, 岩波書店.)
- 伊藤勇, 2012, 「村落社会における事例研究的方法的意義——菅野正・田原音和・細谷昂3氏の庄内農村研究に学ぶ」『村落社会研究ジャーナル』18:44-55.
- Jahoda, Marie, Paul F. Lazarsfeld and Hans Zeisel, [1933] 2002. *Marienthal: The Sociology of an Unemployed Community*, New Brunswick: Transaction.
- James, William, [1892] 1984, *Psychology, Briefer Course*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (=1992, 今田寛訳, 『心理学』上, 下, 岩波書店.)
- 1902, *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature, Being the Gifford Lectures on Natural Religion Delivered at Edinburgh in 1901-1902*, New York: Modern Library. (=1970, 梶田啓三郎訳, 『宗教的経験の諸相』上, 下, 岩波書店.)
- Joas, Hans. 1993. *Pragmatism and Social Theory*. Chicago: University of Chicago Press.
- [1992, *Die Kreativität des Handelns*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.] 1996 (trans., Jeremy Gaines and Paul Keast), *The Creativity of Action*, Chicago: University of Chicago Press.
- [1997, *Die Entstehung der Werte*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.] 2000 (trans., Gregory Moore), *The Genesis of Values*, Cambridge: Polity.
- 鎌田大資, 2006, 「シェリル・クラインマンの感情社会学」, S・クラインマン・M・A・コップ, 鎌田大資・寺岡伸悟訳, 『感情とフィールドワーク』, 世界思想社, 187-232.

- 2007, 「シカゴ学派社会学の揺籃期——ドイツ闘争の社会学の移入と移民周期説」『椙山女学園大学研究論集』38 (社会科学篇):71-83.
- 2011, 「アーネスト・バージェスの社会調査におけるケース・スタディと統計の相克——時期区分の試み」『椙山女学園大学研究論集』42 (社会科学篇):177-92.
- 2014, 「市民社会をもたらす公共圏と社会的世界としての公共圏——社会学研究の礎石としてのハーバースとシンボリック・インタラクショニズムの融合」『中京大学現代社会学部紀要』7(2):1-27.
- 2015, 「公共圏と市民社会の学としての社会学——英仏市民革命期における二つの思想潮流」『椙山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 42:1-12.
- 鎌田大資・中野正大, 2003-05, 「初期シカゴ学派社会学の確立——E・W・バージェスの人と作品」『人文』(京都工芸繊維大学工学部) 51:23-75, 52:73-118, 53:93-133.
- 唐沢かおり・戸田山和久編, 2012, 『心と社会を科学する』東京大学出版会.
- Laplace, Pierre-Simon, [1814] 1840, *Essai philosophique sur les probabilités*, 6ème ed., Paris: Bachelier, Imprimeur-libraire de l'école polytechnique, du bureau des longitudes, etc. ([https://ia600308.us.archive.org/18/items/essaiphilosophiq00l\\_apluoft/essaiphilosophiq00lapluoft.pdf](https://ia600308.us.archive.org/18/items/essaiphilosophiq00l_apluoft/essaiphilosophiq00lapluoft.pdf). 2014年9月14日閲覧) (=1997, 内井惣七訳, 『確率の哲学的試論』岩波書店.)
- Lazarsfeld, Paul F., 1950, "The Logical and Mathematical Foundation of Latent Structure Analysis," Stouffer et al. [1950] 1973:362-412.
- 1950a, "The Interpretation and Computation of Some Latent Structures," Stouffer et al. [1950] 1973:413-472.
- 1961, "Notes on the History of Quantification in Sociology (pt. 2)," *Isis*, 52:277-333.
- Lazarsfeld, Paul F. and Morris Rosenberg (eds.), 1955, *The Language of Social Research: A Reader in the Methodology of Social Research*, Glencoe, Ill.: Free Press.
- Lazarsfeld, Paul F., Ann K. Pasanella and Morris Rosenberg (eds.), 1972, *Continuities in the Language of Social Research*, New York: Free Press.
- Machiavelli, Niccolò, [1513] 1961, *Il Principe*. ([http://www.letteraturaitaliana.net/pdf/Volume\\_4/t324.pdf](http://www.letteraturaitaliana.net/pdf/Volume_4/t324.pdf). 2014年8月19日閲覧) (=1998, 河島英昭訳, 『君主論』岩波書店.)
- 真鍋一史・川端亮・裴岩晶, 2010, 「国際文化交流機関の評価手法開発研究における諸方法(Ⅱ)」『関西学院大学社会学部紀要』109:131-152.
- Mead, George H., 1894, "The Problem of Psychological Measurement." *Proceedings of the American Psychological Association*, MacMillan:22-23. ([https://www.brocku.ca/MeadProject/Mead/pubs/Mead\\_1894a.html](https://www.brocku.ca/MeadProject/Mead/pubs/Mead_1894a.html)).
- Merton, Robert K., [1949] 1968, *Social Theory and Social Structure*, 3rd Ed. New York: Free Press. (=1961, 森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房. 1957年第2版の翻訳.)
- Montesquieu, Charles Louis de Secondat Baron de la Brède et de, [1748] 1951. *De l'Esprit des Lois, Œuvre complète de Montesquieu* tome II (Texte présenté et annoté par Roger Caillois), Paris: Gallimard. (=1987) 1997, 野田良之・稲本洋之助・上原行雄・田中治男・三辺博之・横田地弘訳, 『法の精神』上・中・下, 岩波書店.)
- OED (*Oxford English Dictionary*), 2002, 2nd Ed. CD-ROM Version 3.0. Oxford: Oxford University Press.
- Poisson, Siméon Denis, 1837, *Recherche sur la probabilité des jugements en matière criminelle et en matière civile, précédées des règles générales du calcul des probabilités*, Paris: Bachelier, Imprimeur-Libraire pour les Mathématiques et la physiques etc. ([http://houchmandzadeh.net/cours/Phys\\_Stat/Biblio/Poisson\\_Proba\\_1838.pdf](http://houchmandzadeh.net/cours/Phys_Stat/Biblio/Poisson_Proba_1838.pdf). 2014年8月1日閲覧)



- Quesnay, François, [1758] 2005, *Oeuvres économiques complètes et autre textes*, tome premier, Paris: INED. (= [1990] 2013, 平田清明・井上泰夫訳, 『経済表』 岩波書店.)
- Siyès, Emmanuel, [1789] 2002, *Qu'est-ce que le Tier état?*, Paris: Éditions du Boucher. (<http://www.leboucher.com/pdf/sieyes/tiers.pdf>. 2014 年 4 月 29 日閲覧.) (=2011, 稲本洋之助・伊藤洋一・川出良枝・松本英実訳, 『第三身分とは何か』 岩波書店.)
- Small, Albion Woodbury, 1905, *General Sociology: An Exposition of the Main Development in Sociological Theory from Spencer to Ratzenhofer*, Chicago: University of Chicago Press.
- Small, Albion W. and George Vincent, 1896, *Introduction to the Study of Sociology*, Chicago: University of Chicago Press.
- Spencer, Herbert, [1874-85] 1966, *The Principles of Sociology*, V.1-3, Osnabrück: O. Zeller.  
 ——— (classified, arranged, compiled, abstracted, David Duncan, Richard Scheppig and James Collier) 1873-1919, *Descriptive Sociology; or, Groups of Sociological Facts*, London: Williams and Norgate.
- Stocking, George W., Jr. (ed.), 1974, *A Franz Boas Reader: The Shaping of American Anthropology, 1883-1911*, Chicago: The University of Chicago Press.
- [1968] 1982, *Race, Culture, and Evolution: Essays in the History of Anthropology*, With a new Preface. Chicago: University of Chicago Press.
- Stouffer, Samuel A., [1930] 1980, *An Experimental Comparison of Statistical and Case History Methods of Attitude Research*, New York: Arno.
- Stouffer, Samuel A. and Paul F. Lazarsfeld, [1937] 1972, *Research Memorandum on the Family in the Depression*, New York: Arno.
- Stouffer, Samuel A., Edward A. Suchman, Leland C. DeVinney, Shirley A. Star and Robin M. Williams, Jr., [1949] 1977, *The American Soldier: Adjustment during Army Life* (V.1), Manhattan, Kan.: Military Affairs/Aerospace Historian Pub., Sunflower University Press.
- Stouffer, Samuel A., Arthur A. Lumsdaine, Marion Harper Lumsdaine, Robin M. Williams, Jr., M. Brewster Smith, Irving L. Janis, Shirley A. Star and Leonard S. Cottrell, Jr., [1947] 1977a, *The American Soldier: Combat and Its Aftermath* (V.2), Manhattan, Kan.: Military Affairs/Aerospace Historian Pub., Sunflower University Press.
- Stouffer, Samuel A., Louis Guttman, Edward A. Suchman, Paul F. Lazarsfeld, Shirley A. Star and John A. Clausen, [1950] 1973, *Measurement and Prediction*, Gloucester, Mass.: Peter Smith.
- Strauss, Anselm, 1991, *Creating Sociological Awareness: Collective Images and Symbolic Representations*. New Brunswick, NJ: Transaction.
- 1993 *Continual Permutations of Action*. NY: Aldine de Gruyter.
- Thomas, William Isaac, 1907, *Sex and Society: Studies in the Social Psychology of Sex*, Chicago: University of Chicago Press.
- 1909, *Source Book for Social Origins: Ethnological Materials, Psychological Standpoint, Classified and Annotated Bibliographies for the Interpretation of Savage Society*, Chicago: University of Chicago Press.
- Thomas, William Isaac and Florian Znaniecki, [1918-1920] 1974, *The Polish Peasant in Europe and America*, V. 1, 2, New York: Octagon Books.
- Thurstone, Louis Leon, 1928, "Attitudes Can Be Measured," *American Journal of Sociology*, 33:529-554.
- Vincent, George Edger, [1897] 2009, *The Social Mind and Education*, BiblioLife.
- Woofter, Thomas Jackson, Jr., [1920] 1969, *Negro Migration: Changes in Rural Organization and Population of the*

*Cotton Belt*, N. Y.: Negro Universities Press.

Znaniecki, Florian, [1934] 1968, *The Method of Sociology*, New York: Octagon Books. (=1971, 下田直春訳, 『社会学の方法』 新泉社.)